



風の伝書



短歌詩集 2

izchan

章

頁

風の伝書 ～四月の祭火

.....
・ 2

お花見時計

.....
・ 3

通学路

.....
・ 4

雪解け

.....
・ 5

交響

.....
・ 6

矢車草

.....
・ 7

火の鳥cultivation

.....
・ 8

絵本のひみつ

.....
・ 9

蜜ファクトリー

.....
・ 10

透明な恋

.....
・ 11

切り株は
遣る瀬なき青
霧（む）より出で
萌芽する詩を
今宵見るはず

風、さんざめく神々の息吹
わたしの手は空にようやく触れ
鳥の言葉
無蓋（むがい）の旅人は胸に小さき笛
ぴろっぴ、泣く
ぴろっぴ、笑む
四月の祭火が
天つ原をひた翔ける、茜色
わたしの目は空にたやすく触れ
雲上の海原

ぶなの子は
緑湖の底で
土を飲み
月の光も
たらふく食べる

約（つづ）めのつかぬ悔しさを
滴に封じ込めた
夜陰に流れ込む川は
わたしの赤い、赤い慟哭
風よ
浚（さら）え、定めに砕けた此の心を
界（さかい）を越えて

月夜には
櫻樹の精を
訪ねゆき

うるると抱いて
兎はダンス

儂い夢路か
移ろい消滅する命の炎
ゆらめき、ゆらめけ
甲斐なき飛礫（つぶて）となるな
白き夜
神々の土魂をうたえ
弾き飛べ

押し込めた
ふくろう笛が
拍子啼き
さららと踊る
花びら兎

わたしの唇はうっとり空に触れ
花の匂いと熟れた実
を孕（はら）み
わたしの耳はしなやかに空に触れ
囀りと湧きつづく泉
と生（な）り

ぶな森の
夜が眠れば
暁に
鳥の言葉が
ククと芽生える

四月の祭火が金色（こんじき）に燃える
尽きせぬ命の海原・・

お花見時計

※ ぴんくみち ハルのじゅうたん らった・たっ

※ 桜ふぶいて わっふ わっふふ♪

あるきましょ みつけましょ とまどい時計

おどりましょ さがしましょ ためらい時計

(いま なん時なん分？

(いま ハル時サクラ分

やま桜は葉くらら しだれ桜は枝くらくら

春のうらら はソメイヨシノの花ふぶき

@うずまき

@はちまき

@風のまき

子だぬき8匹 うたうヨサコイ

かた手をあげて くるるるっ

うぐいす 琴をつまびく花衣

古だぬき 太鼓腹にて失礼ポン！

とんねる ちゃんねる 通りぬけ

こちらは むこうで むこうは こちら

(おたがいさまの おかげさま

(おかげさまの おたがいさま

※ ぴんくみち ハルのじゅうたん らった・たっ

※ 桜ふぶいて わっふ わっふふ♪

お花見時計は もうすぐ

ハル時タンポポ分

——ハル時タンポポ分

通学路

赤い屋根。

ち、ち、ちゅちゅん。

雀。

朝のサウンドを甲高く白い靄に

弾ませている。

ガレージに繋ぎし二つ輪ゆり起こし

翔ける春に囀り放つ

街路樹の響き。

さわさわ、

さわ・・

葉がゆれる。

花びらが擦（くすぐ）られて、

笑む。

私も微笑む。

桜咲くラララの朝やチャリ漕げば

風の歌姫吹く通学路

正門脇の花壇。

緑、に水仙の可愛い黄いろ。

混じり合わずに溶け合って、

私のスケッチ。

まあるい、ひらがな歌。

始業ベル花のいろはは綴り行きて

しかめつつらの文字這い来る

雪解け

ずさり落ち
冬を跳ねのけ
雪どけす
ようやくの陽に
笛のよろこび

ふりゅ・りゅりゅ……聞こえなくなっていた
美しい詩のメロディー
春の水笛が小人のように・・踊・る
足枷などあってない
ああ！
かすかな胎動
もこり、足元にもこり、もこり

じゅくじゅくと
雪を頬ばり
土気起きる
落の臺吹く
うらやかな陽に

カシミリアグバクノコバ
常識、の地下牢に幽閉されていた
わたしの音たち
タツントトツ・・踊・る・・クツ
芽吹くよ、芽吹く

山空を
花びらながれ
桜いろ
界も枷も
春に解きゆき

交響

ずずず、ずん…—— 3月の響き。
杉の垂れた枝張り、
雪はしずり軽々と過酷なウンメイの重みから
ぐわり空中へと。

ぎんぎんと月明かり降り山底も
台地と据えて白く俯瞰す

赤い蠟燭の灯。
ちろ、ちろち…ち・ちろ…。
燃えて、
兎の目が問う。
(ソレは緑の命たりえるモノだろうか。)

ると泣く森に迷いて魂鈴を
夜の帳に沈めたる日々

けれど春は廻りくる。
わたしの内なるエネルギーは解き放たれ、
撓る、喘ぐように仰け反り。
針葉は羽ばたく。

銀の鈴の音。
しゃんしゃら、しゃんしゃん…。
ぴんと開く、兎の目と耳。

矢車草

さだまりて
机の壺で
ルリが謂う
矢車草とて
想い色々

壺が謂う
ルリひと色の
泣き笑い
ひとの心の
熱きプリズム

灰白の可愛い瓶、そこだけ庭が小さく匂う
「執筆の慰めに。」やはり優しい人なのだろう
コトバがやわらかな陽射しの体温となる

春の陽に
抱擁されて
いろと生（な）る
壺もひと手も
ルリ花の絵（かい）

火の鳥cultivation

心に、ふっと沸騰する
紅色redの仄かな灯花

ちぢこまってる..
まだねむい..

朝がキラメキ覚めれば
流常・務情・浮上する羽状の葉
(*I can't feel it, yet.*

「お生憎さまの感覚でしょうか
「いえ、いえ、cultivateしましょう

尚、なお、合歓の木は暗示的表示の声

幻の...——ソレは夏の風..

ヒカリ発ち紅の冠解かれて羽ばたく鳥の自由掴みおり

——履き違えのイマは、四月の温もり
誤解・曲解・難解
山はこれから漸くの雪解け
ゆるむ..ゆ..るむ..
合歓の季節はまだ揺り籠の中

イマージュ、樹《ジュ》、鷲《ジュ》、、
...翔・け・る

「それはイツ始まり..

夢のように聞いて
不死鳥の伝承は埋み火に
(*Never give up!*
うっとり眠り

幻のように...——春の光り..

火の鳥に界ほどけゆく天壤をユラメキわたる破生の光り

破壊と再生をくりかえし
、萌えるイノチ
恰もの摂理のように...

絵本のひみつ

ぴよこぴよんと花陰あそぶ小さきが
ひとみの奥に童話はこぶよ

やぐるまの花にトクトク小人らは
春の壺から色ながしこみ

(ふしぎでしょ

(ほら 花の絵本のできあがり

現(うつつ)より花はさやさや溢れいで
囀(さえず)るさまは幻のごと

ちいさな ちいさな 窓

ひみつにしてる

そこから朝が あたしにだけ

ほほM (えむ)

ね なにみてるの？

「 」

くすっ ちいさな窓のコトバ

けさは ひかり語圏ね

そんなふうに

きのうの雨はもうどこにもいなくて ミルクティー
のような口あたりで

今日の目次をゆっくりひらく

さがしていたレモン味はとおい蜃気楼
のゆらめきで記憶チップに入っているから 午後には
矢車草をかざってレモンティーをいれて..

ぬけられない沙漠の砂絵に緑のオアシスを描こう

ラクダには金と銀の鞍——

心の宝石箱

キラキラ収束してゆく星型の瞳は

かるやかに踊るあなたへのメロディー

耳を澄まして

とんとん… とん…

風の郵便屋さん

やさしく心のちいさな窓を

とんとん…

「もしもし、蜜屋（みつや）さん。

蝶さんも、蜂さんも、蟻さんも、おまちかねですよ。」

[ローカル線]

無人駅

虫のお客が

わふわふと

乗り降りしてる

菜の花列車

誉ある

花のスタンプ

ありがとう

雄しべの金は

実になる冠

菜の畠で

特製蜜を

おまちかね

花びら駅は

もうかりまっか

人生の蜜づくりには時計がいくつもいる

カチカチ…土づくり

カチカチ…苗づくり

カチカチ...花づくり

今日という味わいは、人生の蜜の一匙（さじ）
分かち合う喜び

ポエムな一日..

透明な恋

4月8日

新学期、一目惚れすることにした。

あま翔ける翼はみせずコートの中
天馬の君は二足歩行で

4月10日

投稿サイトに、恋の詩をひそませた。

トキトキと透明な手が文字に触れ
実体のない僕を現わす

4月11日

酷告黒刻哭谷克、孤苦。

刻刻と死んでもまた生まれよう
ぎりぎりといノチが紅く滲む日

4月21日

日曜日の午後、2×1目惚れをすることにした。

透明な天馬が、2回ウィンクした。

すてきだな…